

東京戸張 施設管理捕獲対策用 獣害対策

資材ナビ

農業用ネットや落石防護設備を手掛ける東京戸張(東京都港区)の「獣害対策用管理捕獲施設」は、ニホンザルを効率よく捕獲するために開発した。柵の上部を鉄板パネルで縁取った囲いなので、サツマイモやかんきつ類などの餌を内部に置いただけで群れを誘い込んで逃がさない。高知県四万十市の奥屋内地区では、特産のユズや水稲の被害が大きく減り、農家の営農意欲を支えている。

パネルに工夫

同地区は集落へくるまで獣害対策に取り組み、防護柵の設置でインシヤや鹿の害は減ったが、2004年ごろから猿の被害が急増していた。猿は、ユズの葉を食べて樹木を丸裸にして枝も折る。樹勢が弱まり、収量が大きく減る。捕獲用のおりを設置し



猿の群れ誘い逃さず



■獣害対策用管理捕獲施設
5×8坪が最小サイズで、8坪四方、10坪四方の3種類、大きな設置場所は自治体や住民、猟友会などと協議して決める。価格は、愛知県近郊の場合、135万円(税別、施工費込み)から、地域や設置場所で変動する。問い合わせは東京戸張浦部支社、電話055333(60)7151。

たこともあるが、10年以上、1頭も捕獲できなかったという。水稲80坪とユズ50坪を栽培する秋元貢一さん(65)は「施設を設置した昨年はユズの収量が、これまでの倍以上の1・4坪に達して効果を実感した」と話す。施設は広さが5×8坪の囲いなので、四隅は丸みを帯びている。高さは2・7坪で、天井がないが、柵の上部全体を鉄板パネルで縁取った。パネルは、施設の内側下方向に向けて傾斜しており、「出られると思っただけで、下から飛び上がって絶対には逃げられない」と秋元さん。長さや傾斜角度に工夫があり、同社が特許を取っている。

4カ月で49頭

同地区に施設を設置して3カ月で群れがかかった。「天井が開いており、ある程度の広さがある。猿の警戒心を薄れさせるのではないかと秋元さんは分析する。秋元さんが驚いたのは、前日に施設に入っただけで猿がいても、翌日には別の個体が同鉄板パネルで縁取られた構状の施設(高知県四万十市で)に入っていた」と話す。

同地区では、かつて特産だった栗栽培を再生する試みが勢いづく。弘井さんは40坪に苗木130本を植え、「産地を復活させたい」と意欲的だ。地区の獣害対策をサポートするJA高知県幡多地区幡東営農センター鳥獣被害対策専門員の小野川博友さん(56)は「獣害対策は地域を活性化、人の輪をつくることでもある。施設はその一助になっている」と話す。